

タイトル	ことばの履歴書 - 「人文」と「文化」
著者	大谷, 通順; OTANI, Michiyori
引用	年報新入文学(18): 2-6
発行日	2021-12-25

ことばの履歴書——「人文」と「文化」

大谷 通順

武漢発の新型コロナウイルスが世界を席捲してはや二年がたった。このウイルス、中国名を「新型コロナウイルス」状病毒というが、それではまどろっこしいので「新冠」とつづめ、単独では使用せずに、病名「肺炎」につなげて「新冠肺炎」（日本語の「新型コロナウイルス感染症」に相当とするのが一般的だ。しかし、じつはもつと頻繁に耳にするのが「疫情」というよび名なのである。語の組み立てに厳密に従えば、「疫情」とは本来は疫病の「情況」を意味するはずだ。「世情」や「敵情」（日本語も同形）と同じ構造であるから。ところが昨今の使用実態を見ると、「疫情」は疫病の「流行」を直接に指す例が多く、果ては疫病「そのもの」を意味する場合さえある。国連の中国語正式文書に「兒童に対する「疫情」の影響を軽減する」などがあるのがその明白な用例だ。日本語でも「コロナ」の一語でウイルスからその流行までを片づけるところをみれば、日常語というのはつくづくミニマル志向である。

十年前に北京で研修していたとき、宿舍のそばで大規模な再開発があり、工事中の一街区をおおう広

告看板に、巨大な「人文的」の文字が躍るのを見た。当時はそれが目新しく、周囲にたずねて、ようやく「人をたいせつにする」とか、「人にやさしい」というニュアンスの新語であることを知った。



「“人文”的な大邸宅」：安徽省蚌埠市のマンション「百合公馆」のキャッチフレーズです。



河南省鹤壁市の「小区」(独立居住区画)が「朝歌里」(地名) + 「人文」 + 「小镇」(小さな町)と名づけられています。(不動産の紹介ビデオより)

この「人文」の語は、いまや中国各地で開発が進む高級住宅街やマンションを飾るキャッチフレーズとして、不動産広告にあふれかえっている。特によく目にするのは「人文家園」という用例だ。「家園」とは読んで字のごとく、直接には「家屋」と「庭園」を指すが、意味は「家庭」や「郷里」にひろがる。「人文」がそれを形容している格好だ。日本語でその「人文」にふさわしい訳語をさがすならば、「文化的」あたりになるだろうか。

生活や居住環境を形容する日本語の「文化」については、日本国憲法第二十五条に「健康で文化的な最低限度の生活」という文言があることもあって、これまでに議論や定義が重ねられ、私たちにもある程度の共通認識はできていると思う。要するに、単に肉体的に生存するだけでなく、人として精神的に満たされた生き方、あるいはそれを実現する営みを「文化」というのであろう。しかし、そもそも「文化」の語それ自体は中国の古典に早くから見られ、「武威を用いずに民を教化する」という意味だった。それが明治・大正期の日本で「Kultur（独）」の訳語として新たな生をうけ、清末・民国初期の中国語にも日本語由来の外来語として吸収されたのだ。ところが当初は学術的な専門用語も、いったん日常語に流れこむと、思わぬ逸脱がはじまる。極端な例として、日本語では「文化住宅」や「文化たきつけ」のように「利便性」や「今様」にかたよった例がとびだした。中国語も、現今の日常語では「教育」という意味あいが強くなり、「没文化」とは「無学・無教養」、「文化水平」とは「學歷」のことを意味する。

いっぽう「人文」の語は、中国の古典的用例では、世界を形成する三つの素材（天・地・人）の有り様（「文」）、すなわち「天文」・「地理」・「人文」のひとつだった。そのうち「人文」の「文」では「文字」という一面が突出し、人間の精神活動とその表現形態の全般を意味するようになった。それ

が明治・大正期の日本で「humanities（英）」の訳語として再定義され、やはり民国初期の中国語に吸収されたのだ。しかし、先の不動産広告の用例に至るまでには、まだ一定の道のりが必要だ。おそらく「human」のうち「人間味のある」「思いやりのある」などという形容詞の側面が拡大して、日本語の「人」には見られない、あのようなキャッチフレーズが生まれたのだろう。

しかし日本語ならば「文化的」と表現するところ、中国語ではそれを避けたかのように「人文」の語が選ばれた、その経緯になにやらいわく言いがたいものを感じる。

中国で「文化」が選択されなかった理由として第一に思いあたるのは、先述のように、もともと「文化」の「文」は「武」の対義語で「文字」を主たる表現形態とし、「化」は「教化」の意味に過ぎず、「人」の要素がいつこうに表面に出てこないことだ。しかも、その「文」たるや「文以載道（文はもって道を載す）」という、宋代の儒学にさかのぼる常套句がしめすように、思想や道徳（「道」）を盛りこむための、いわばプロパガンダに堕しかねない代物なのだ。

第二に、「プロレタリア文化大革命」の記憶が「文化」のまぎれもない実例として、人々の脳裏に焼きついていることだ。「文化大革命」の「文化」が、私たちの「文化」理解と異なることをしめす典型例として、一九六七年、川端康成・石川淳・安部公房・三島由紀夫が連名で発表した文革反対声明がある。そこで四氏は、中国の「学問芸術」が政治権力の具から脱して、自律性を恢復するように訴えた。しかし、当の中国では「文化」（学問芸術）はすべて一定の社会階級や一定の政治路線に属するものであり、時あたかも「ブルジョア実権派」と「造反派」が「文化陣地」をめぐる争奪戦のまっ最中にあつたのだ。社会階級をこえて「人」を包括的に論ずることや、「文化」の超階級性を説くことなどは、まさにブルジョ

ア知識人の階級の本質にほかならず、厳しい批判にさらされるのが落ちだった。

文革の嵐が吹き荒れたあと、一九七〇年代末期に続々と出現しはじめた「傷痕文学」は、文化的な分断のなかで発生したいくつもの悲劇を伝える。とりわけ代表的作品のひとつ、戴厚英『人啊，人！』（ああ、人間よ）は階級闘争の渦中でボロボロに踏みしだかれた「人」の一体感を取りもどそうとする主人公の苦しみを描いて、若者たちの共感を呼んだ。留学中の私も級友から当時貴重だった一冊を借りうけ、徹夜で読んだことを覚えている（次の借り手が待っていたので）。そのようなわけで、高級住宅地を形容するために「文化」ではなく「人文」の語を選んだコピーライター氏の意識には、なんとかして「人」に重きを置こうとする苦心があったと思えてしかたがないのである。

「人文」と「文化」はともに西洋の概念の翻訳語として、ほぼ同時期に日本語と中国語の土壌に植えつけられた同一の種子だったといつかまわらないだろう。ところが、それぞれの環境や境遇によって異なった成長をみせ、いまや異なった花を咲かせているのだ。なんとも興味深いことである。

蛇足ながら中国「プロレタリア文化大革命」の一連の局面、すなわち(一)識字教育・文化啓蒙活動・学制改革などによる人民の文化レベルの引きあげ、(二)文化の担い手の交代（ブルジョア知識分子よりプロレタリア人民へ）、(三)プロレタリアによる新文化の創生などについていえば、一九二〇～三〇年代にスターリンのもとで進められたソ連の「文化革命」(Культурная революция)に似ている。しかし中国では、過渡期としての社会主義には階級闘争が必須であるという明確な戦略のもと、当初より主戦場として「文化」に標準をさだめていたところに違いがある。

（おおたに みちより・北海学園大学大学院文学研究科教授）